FUKUSHIMA × NAGASAKI University
福島と長崎大学 これからの10年

インタビュー

福島だけが経験した複合災害を伝承

～一人ひとりの歴史・証言を保存～

長崎大学 原爆後障害医療研究所 教授／福島未来創造支援研究センター センター長
東日本大震災・原子力災害伝承館 館長
高村 昇

巨大地震、津波、原子力災害という前例のない複合災害。「災害のことはもちろん、災害に立ち向かい、今も続く復興に取り組む人々の思いを知ってほしい」と高村館長は語ります。

災害にどう立ち向かったかを展示 語り部の講話で災害の風化を防ぐ

2020年9月20日、福島県双葉町に「東日本大震災・原子力災害伝承館」が開館しました。伝承館は、福島だけが経験した震災・津波・原子力災害という複合災害の記録と記憶を、今後の防災や減災の教訓として伝えることを目的としています。

館内では、福島県が収集した約24万点の資料のうち約150点を「災害の始まり」「原子力発電所事故直後の対応」「県民の想い」「復興への挑戦」など6つのコーナーに分けて展示しています。

被災者の生の声を聞く「語り部講話」も行っています。震災と原発事故の記録は、展示されている資料がすべてではありません。複合災害とその後の混乱を経験した人たちの話を聞くことで、震災や原発事故についてより詳しく知るきっかけにしてほしいと思います。

すし、話を聞いた人が当時の追体験をすることで、災害の風化を防ぐことができると考えています。

福島が歩んできたこの10年は、震災と原発事故の発生、混乱、避難、収束、除染、帰還、復興と、これまで誰も経験したことのないことばかりでした。伝承館では、今後も一人ひとりが複合災害にどう立ち向かい、復興にどう取り組んでいるのかを、生の声をアーカイブし続け、来館者が「誰も経験したことのないことが起きたんだ」と思える場になるよう努めていきます。

川内、富岡、大熊の復興過程は異なる それぞれの状況に沿って支援を継続

私は、2011年の東京電力福島第一原子力発電所事故直後から福島県に入り、県民の皆さんに放射線被ばくと健康影響について、科学的な見地から説明を行ってきました。また、原発事故により住民が避難を余儀なくされ、その後、帰還を開始した町村の復興支援にも取り組んでいます。

いち早く全村帰還を宣言した川内村では、帰村前から環境放射線モニタリングを行い、その後は戻ってきた村民が安心して暮らせるよう、リスクコミュニケーションを積み重ねるなど支援してきました。2013年には川内村と長崎大学が包括連携協定を結び、復興推進拠点を設置しました。2016年には隣接する富岡町と、2020年には大熊町と包括連携協定を締結し、復興支援を行っています。

ただ、町村によって復興の過程は全く異なり、それぞれの状況に沿った復興への取り組みと支援が求められます（P18の図参照）。川内村の居住人口は震災前の約8割まで回復しました。しかし、富岡町は震災前の1割弱の1500人しか帰還しておらず、大熊町は数百人です。伝承館のある双葉町は現在も大部分が帰還困難区域で、帰還は始まっていません。

放射能による汚染の度合い、除染の進み具合などにより、帰還困難、居住制限、避難指示解除準備などの区域の面積が異なり、解除される時期も違ったので、各町村の復興の道筋も自ずと違ってきますし、支援も画一的にはできません。川内村での復興と支援の“成功体験”をそのまま、富岡町や大熊町では生かせないのです。

福島ではいまだ3万人以上が避難生活を余儀なくされています。震災から10年は一区切りですが、復興に終わりはありません。長大は、それぞれの町や地区の状況を把握し、役場のマンパワーなども考慮しながら、支援を続けていきます。

双葉町にオープンした東日本大震災・原子力災害伝承館

東日本大震災・原子力災害伝承館の展示物

小学3年生が感じた“辛さ”を語っていきたい

東日本大震災・原子力災害伝承館
渡邉舞乃さん

震災に遭ったのは、南相馬市の原町地区の小学校3年生のときでした。全校児童が校庭に集まり、迎えに来ることができる家族もいないため、友だちとそれぞれの家に向かいました。屋根瓦が落ちていたり、ブロック塀が倒れていたり、これまで見たことのない風景の中を歩いて帰りました。津波は寸前まで来ましたが、家族や友だちが犠牲になったという経験はしていません。

父は電気工事技術者で、震災当日は福島原発1号機の高所で点検作業をしていました。激しい揺れに襲われ、暗闇の中、転落しないよう急いで降り、走って逃げたといいます。原発で何が起きたのか父には分かっていたようで、二次避難の前に家族で山形に自主避難しました。

私が辛かったのは避難生活ではなく、転校したことでした。知らない人たちの前で挨拶するは初めての経験で、とても緊張しました。でも、すぐに友だちもでき、小学6年生まで楽しく暮らしました。

一方、父は暗闇での揺れがトラウマになり、山形から南相馬の職場まで高速道路やトンネルを通るのが苦手になっていたため、南相馬に戻ることになりました。私も1歳上の姉もまた転校するのが嫌でしたが、最終的に小高に戻りました。

高校は新設の県立小高産業技術高校に進みました。スーパー・プロフェッショナル・ハイスクールの指定を受けた高校で、カリキュラムには地域活性化への取り組みなどがありました。震災から9年間、転校という私には不安で辛いことを除けば、震災はすっかり過去のこととして自分の中では完結していました。

しかし、伝承館ができるという話を聞き、改めて津波や原子力災害のことを学ぼうと考え、伝承館に就職しました。そして一人ひとりが違う体験をし、今も悲しい思いを抱いている人がたくさんいることを知りました。私も小学生だった私だからこそ経験した辛さや不安を伝えるのも大切だなと思うようになりました。将来は若者の語り部として、震災からこれまでのことを語っていきたいと思います。